

平成23年度 学校自己評価表(中間評価)

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 学校文化度の向上と地域からの信頼向上 2 学校教育力の向上 3 進路指導の充実 4 専攻科教育の充実 5 定時制教育の充実</p>
---------------------------	--	----------------------	--

年度当初				評価結果			
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 学校文化度の向上と地域からの信頼向上	規律ある生活と「文武両道」による自立の促進	<ul style="list-style-type: none"> 校内に品位と落ち着いた爽やかな雰囲気を感じられる。 生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 全員が部活動に加入し、積極的に活動するとともに、切り替えを上手に行い、勉学に励んでいる。 自分の置かれた立場や場面に相応しい言動ができる。 教員に「率先垂範」の姿勢が浸透している。 	<ul style="list-style-type: none"> 集団生活を行う上での基本的マナーが身に付いていない生徒が一部にいる。 清掃、ごみ削減、節電等を含めた生活環境の整備に主体的に取り組めていない生徒が一部に見られる。 部活動の加入率は高いが、一部に学習との両立ができていない生徒がいる。 周囲に配慮して行動できない生徒が一部に存在する。 生徒に自ら範を示そうという姿勢が浸透しつつある。 	<ul style="list-style-type: none"> クラスや個人に対して指導・面談を繰り返すことにより、指導7項目を遵守させる。 普段の清掃時間やTEAS(鳥取県環境管理システム)LHR等で生活環境委員会が主体となって生徒自身が環境整備に主体的に取り組む意識を高める。 部顧問・外部指導者・担任等が連携し、文武両道が実現されるよう働きかける。 粘り強く個別指導を行い、自己の責任と集団に与える影響について自覚させる。 職員が「倉吉東高のかたち」の実現に向けて、それぞれの取り組みを職員研修等で情報交換することにより、目指す方向性を共有する。 学びの主体性を育成するための研究を組織的継続的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 服装容儀に反する生徒が一部に見られる。 ゴミの出し方を含め、部室の管理・使い方が悪い。 文武両道については、根気強い指導で習慣化出来た生徒も多いが、1・2年生の中には両立できていない生徒がいる。 規律ある生活に関する自己の責任と集団への影響の自覚について、3年生は意識できているが、まだまだ物足りない。1・2年生についても同様である。 「倉吉東高のかたち」は、今年度より具体化を図り、教員の認識が深まって目指す方向性の共有に寄与した。 学年団・進路指導部の連携によるアカデミックな刺激に対しては、上級生を中心によく反応している。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 学年集会等で服装を整えることの意味について話し、授業の初めの挨拶の際等、機会を捉えていつでも・誰でも注意する指導を継続して行う。 部顧問・生徒会・担任等が連携し、部室使用の適正化や部活動時間の遵守から文武両道が実現されるよう働きかける。 学年全体での指導と並行して、個別指導を継続し、多くの職員から働きかける。 繰り返し面談して自覚を促す。 <p>・知的な好奇心を刺激する機会を継続的に設定する。</p>
	中高連携の強化と高大接続の円滑化	<ul style="list-style-type: none"> 各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されていると同時に、本校も各中学校の実態を十分理解している。 生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。 中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。 生徒が大学での学びについて理解し、単に大学に合格するための学習を越えて、生涯にわたる学習の基礎となる重厚な学びを行っている。 職員の誰もが本校の目標や実態を外部の人に説明できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。 数学、英語、体育以外の教科について連携があまり見られない。 高大連携について、大学紹介のレベルで終わっている。 年に数校大学を訪問し、大学の情報を把握するとともに職員への情報提供を行なっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 業者と相談してHPを利用しやすい形に改善するとともに、分掌担当の教員を中心に、全職員でHPの更新を行い、外部への情報発信に努める。 高校説明会で本校に来た生徒に対し、チューターを中心に多くの在校生が説明を行ない、生徒の視点で倉吉東高の魅力を伝える。 中学生特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加(参観、ティームティーチングなど)を呼びかける。 中学校出前授業に積極的に応じる。 中学校説明会・進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。 本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、進路指導部や教務部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。 大学教育の研究を深め、教員や生徒が参加できる体験講座の機会を設ける。 倉吉東中学校との「スクラム教育推進事業」に取り組み、中部地区全体の中高連携を促進する。 高校生フォーラムや学園祭等、本校の特色ある教育活動を中学校等へ公開していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月下旬に倉東公式HPをリニューアルし、本校の教育内容が外部に伝わりやすいように改善した。 中学生を対象とした高校説明会では、チューターの生徒が出身中学の生徒に対して施設説明等を行い、生徒視点で東高の魅力を伝えることができた。 音楽、体育で5講座実施予定。(一部実施済) 中学校に出向いての高校説明会では、本校の多くの職員が中学生に対する説明を行った。 必要に応じて、関連する教員が説明に出向き、多くの教員で対応することができている。 鳥取大学より講師を招き、自己表現講座を実施したり、実際に大学へ出向き「高校生科学セミナー」などに積極的に参加することができている。教員の大学訪問も11月に計画している。 スクラム教育では本校職員が中学校で授業を実施したり、中学校側から本校の授業を参観および体験学習をするなど相互連携のもと事業が推進されつつある。 ホームページや学校説明会等で本校の特色を公開することが出来ている。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 多くの職員が積極的にホームページを更新できるよう意識を高めていく。 高校入試に向けて、全県の中学校に積極的に説明していく。 中高連携、高大連携事業の振り返りアンケートを行い、成果と課題が明確になるように取り組む。 スクラム教育の取り組みが本県中高連携のモデルとなり、県全体の学力向上につながることを目指す。
2. 教育力の向上	教員研修の充実と授業の工夫改善	<ul style="list-style-type: none"> 教員一人ひとりが、高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えている。 テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなるよう指導が行われている。 生徒の進路希望や発達段階に応じて、教員が集団として時宜にかかった教科指導を行っている。 指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。 生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。 生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。 教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 「共同的学び」について研究し、一体感のある授業実践を進める。 魅力的かつ効果的な授業を行うために、教科内はもちろん、他教科の授業相互参観を実施する。 年2回実施する生徒による授業評価アンケートの質問項目について、生徒の状況の把握や教員の授業に対する客観的評価ができるようなものに見直し・改善を行う。 授業評価アンケートの結果分析をより詳細に行う。 教科指導先進校教師招聘事業を積極的に実施し、事後の研究会を通して教科全体の指導力向上を図る。 予備校派遣研修を行い、研修報告書を作成し、活用できる指導ノウハウを教科会で共有化し、日々の学習指導で生徒に還元する。 定期考査、進路指導テストなどの問題作成において協議・検討を行い、学習到達度を確保するとともに、3年間を見通した教科指導を行う。 本校で計画、実施している様々な指導力向上プログラムが効果的に機能するように研修部を中心に随時チェックし、機能するように工夫する。 様々な教員研修がより効果的に行えるよう、実施時期や内容について研修部が中心になり計画・調整を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「協同的学び」(共同的から修正)について各教科から具体的方策を出してもらい、職員会議で教員間で共通理解し、授業で取り組んでいる。 5月末に授業相互参観を実施し、成果があった。 授業評価アンケートを6月に実施し、集約・分析。昨年度と比較し、全体的に評価が上昇している。(別紙) 県外教員との授業実践については、11月に実施予定(勝山高校・三浦教頭を招聘予定)。 予備校派遣については8～9月に5名派遣(数・英・地歴)。特に難関大志望生徒への指導の一層の充実を図る。 進路指導テストなどの問題作成において、平均点管理の面で課題が残る教科がある。 教員の大学訪問については、11月頃に計画している(横浜国立大・電気通信大を予定)。 教員の先進校1週間研修については現在選定中。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 各教科で具体的方策を講じ、より一体感のある授業実践を進める。そのために11月に勝山高校・三浦教頭を招聘し、「協同的学び」を創出する日本史の研究授業を予定している。 予備校派遣については、冬休みなどの長期休業期間にさらに派遣する予定。

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3. 進路指導の充実	教員の進路指導(進路目標を見据えた生き方指導)力の向上	・進路指導が単なる「出口指導」に終わることなく、生徒が「学力＝生活力」であることを自覚しながら、その意識が「今・自分・依存」だけでなく、「将来・社会・責任貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。 ・生徒の志望と適性を理解し、生徒にとっての望ましい方向性をイメージしながら、3年間のどの段階においても適切な助言を行っている。	・学力向上対策が先行しがちになり、人間形成の基本的プロセスが抜け落ちてしまう場面もある。 ・3年間を見据えた系統的な教科・進路指導計画を立案し実行しているが、各時期において十分な達成度が得られていない場合がある。また目の前のことで精一杯となり、将来への意識を持つことができない生徒もいる。 ・生徒の志望や適性を理解するために生徒との面談を随時行っている(クラス担任、分掌主任など)が、学年や個々の教員により多少の情報量の差がある。	・学年会等を通じて生徒情報を共有しながら定点観測を行い、常に生徒の成長のプロセスを意識した指導を継続的に行っていく。 ・新旧3年・専攻科担任会や判定会等を進路研修会として学年の枠を超えて引き継ぎや内容を共有し、本校の進路指導の指針を明確化することですべての教員が適切な進路指導力を身につけられるようにする。 ・志望校決定や大学の知識だけを養うLHRにならないよう、生徒が将来を展望でき、自ら開拓しようという意欲をばぐむ進路LHRを計画・実践する。 ・読書・小論文指導を重点指導項目とし、生徒が現代社会を考察し語れるようになるよう、小論文活動を推進するとともに支援する力を養う。 ・3年間を見据えた教科・進路指導を効果的に行うために、綿密な学年会を行い、生徒との面談や家庭学習調査、各試験結果分析などを通して得た情報を教員間で共有し、生徒個々に応じた指導をきめ細かく行う。 ・学校訪問対応、中学校説明会等に参加することで広報力を養うとともに同じ方向性で組織的な指導が実践できるようにする。 ・全国的な情勢を掴むために、適切な時機をとらえて教員・生徒・保護者に対して研修会を実施する。	・状況把握力や問題意識、対応力に若干の教員差が認められる場面もあるが、面談量は良好である。 ・新旧3年・専担任会や進路判定会では、旧担任から新担任への引き継ぎや進路情報の共有ができ、よい研修会となったが、教員の進路指導力や意識を全般的に更に向上させたい。 ・3年生に対して7～8月にかけて小論文指導を実施し、早い段階で意識付けを行うことができたが、現時点で小論文に対する苦手意識が払拭しきれていない。 ・8月に進路講演会を保護者向けに行い、進路情報の提供と進路意識の向上に努めた。	C	・教員間の共通理解のもとに、人間形成につながる指導を日常的に行う。 ・面談力を向上させるために、学年担任会を通じて学習指導・進路指導の在り方を検討し担任間で共有していく。また、担任だけでなくあらゆる教員がいろんな角度から生徒と接点を増やし、刺激を与えながらサポートしていく。 ・学年団を主体として、あらゆる教員に進路指導に参画する機会を与える。 ・定期的に小論文対策・指導を行うなど、表現力を高めるための企画を学年・図書部と連携しながら立案し実行する。
	国公立大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現役合格者数150名。 ・ブロック大学レベル以上合格者数現浪合計70名。	(現役合格) ・昨年度名157名。一昨年度175名。一昨々年度126名。 (ブロック大学レベル以上合格者数) ・昨年度67名。一昨年度83名。一昨々年度55名。	・授業、放課後学習、家庭学習の差異化をはかり、それぞれの学習の意味づけや関連づけを面接を通して伝える。 ・生徒の学力実態を正確に分析し、進進者指導を迅速かつ手厚く行う。 ・面接は、担任・副担任・教科担任・部活動顧問など多くの教員が関わり、生徒1人1人が何をどう学習すべきか具体的に支援し、適切な処方箋を与え続ける。 ・教員は校内・校外模試の意義を理解し、生徒に常時伝えるとともに、保護者に対しても学年通信やホームページを通じて伝達する。 ・各学年、各時期の到達目標偏差値を確実に達成する。	・3年生においては、英語の早期補習をはじめ、各教科で実態に応じた補習を適宜実施し、多くの生徒の意識向上に貢献した。 ・夏の大山合宿では、教養クラス119名が参加し、OBOGや職員とともに、集団で学習することの意義を理解することができたが、実生活に生かし切れていない生徒もいた。 ・5教科総合での平均点偏差値が目標偏差値を上回っており、過去最高の成績を上げたH21年度と昨年度との間あたりを推移している。	B	・前期日程で力尽きることなく後期日程試験まで頑張る生徒を育てるため、模試成績や精神面を常時チェックし、学年団・進路で連携して支えていく体制を強化する。
	難関大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・難関大学現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	(難関大学) ・昨年度16名。一昨年度33名。一昨々年度17名。 (東京大学) ・昨年度6名。一昨年度4名。一昨々年度2名	・各教科や教員間で昨年度の実績や指導法を確認伝達し、効果的な指導法を確実に新年度へ継承していく。 ・各教科で大学入試問題研究を充実させ、各志望レベルに応じた学力育成プログラムを作成し、授業や課外に即反映させる。また、適宜教科面談を実施し、個に応じた適切な情報提供や進路指導・学習指導を行う。 ・OBや専攻科生を活用し、実績ある先輩の学習法や心構えを下級生に伝える。 ・明確な目的をもった文理学術クラス検討会を定期的に開催し、一貫した指導を行う。	・2年生では県主催の難関大合同合宿に参加し、他校のライバルと空間を同じくすることで難関大に挑戦する意欲をさらに高めることができた。 ・難関大に進学したOB・OGを3年学術クラスに招き、受験体験を語ってもらった。現役生からの質問も活発に行われクラス全体的に難関大に向かう雰囲気をつくることができた。 ・9月から3年・専攻科合同放課後補習を実施しているが、教科によってはグレード別で行っており、現浪が切磋琢磨する環境で学習している。 ・現段階の学力で見れば適正な人数が難関大に出席しているが、合格するためには一層の努力を要する。	C	・3・専合同補習を核に、各教科からチームとして同志集団をまとめサポートしていく中で、学年団・進路・担任が連携して個人個人の教科を束ねていく必要がある。 ・安易に受験科目数を減らさないよう精神面を鍛え、強敵と闘い抜くための試練を適宜与えていく。
4. 専攻科教育の充実	予備校との差異化と適正な進学実績の維持	・県内各地から集まった生徒ひとりひとりが県立の専攻科である意味を理解し、学問に対して誠実に主体的に取り組むことによって、公共の利益に資する精神を涵養している。 ・受験勉強を超えた学びの本質に触れ続けることにより、現役生をリードし、国公立大学合格者数の50名を維持する。	・中部地区の高校だけでなく、東部地区・西部地区の高校卒業生も入学している。 ・受かる大学ではなく、入りたい大学を目指し専攻科を希望する者が減ることなく、専攻科志願者が5年続けて定員を10人以上上回っている。 ・県民に感謝しながら学ぶ生徒が増えている。 ・近年順調に実績を挙げている。過去3年間の国公立大合格率は83%、修了生の東大合格者数は6名である。 ・専攻科廃止決定後の動向を、保護者・在校生を中心に注目している。	・8:00からの早朝学習と休日の校舎開放を行い基本的学習習慣を確立する。 ・「学び祭り」を実施(7月)し、各自が発表テーマを設定・研究し、プレゼンテーションを行う。(INPUT学習からOUTPUT学習への転換) ・県立図書館・学校図書館との連携を図り、あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。 ・積極的なボランティア活動への参加を推奨し、社会貢献を志向する態度と肯定的自己概念を育成する。 ・3年生との合同課外を実施し、互いに刺激を受けながら学び合うようにする。 ・現役生への進路チューターを行い、自身の取り組みを振り返るとともに目標を明確化する。 ・専攻科OB・OGの講演会を開き、意欲を喚起する。	・8時前後には9割以上の生徒が登校し、学習している。遅刻は皆無である。 ・挨拶・清掃指導は徹底的に行い、自転車の置き方など学びの場としての専攻科を自覚しつつある。 ・「学び祭」では2日間19テーマを全員が考え、質疑応答で深めながら学問全般を俯瞰した。そこに至るまで、校内の図書部が県立図書館と連携をとり、館内ツアーや学校貸出等、多くの専門書と触れあう機会を得た。 ・専攻科OB・OGが専攻科棟でミニ講演会を行ったり、大山合宿や難関大合宿などで講師を務めるなど後輩の進路実現のために貢献している。	B	・専攻科生と現役生とが互いに影響を与えあえるよう、3・専合同課外で現役生を刺激したり、学び祭でのプレゼンを現役生にひろげたりしていきたい。
5. 定時制教育の充実	進路保障と学力の定着	・生徒の進路実現に向けて基礎学力の定着がなされている。 ・わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。 ・課題に真面目に取り組む、提出物の期限が守られている。 ・生徒が心身ともに健康で、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。	・自己の将来像が描けず、進路意識に乏しい。 ・基礎的な学力が不足しているために、理解するのに時間がかかる。 ・生活環境面などで課題を抱え、積極的に学習に取り組めない生徒が少なくない。	・生徒個々の状況を職員間で共有し、学年を問わず個別面談を重視し個々に合った指導を行う。 ・わかりやすい授業を工夫し、基礎的な内容を繰り返し行い基礎学力の定着を図る。 ・1年次よりキャリアアドバイザーとの面談を効果的に取り入れ、生徒の進路意識の向上を図る。 ・保護者や、生徒が働いている企業の担当者との連携を密にし、進路実現に向けて協力を得る。	・4月の個別面接に加え、夏季休業後にも全生徒と面接を実施したり、毎週情報交換会を持ち、職員間で生徒の共通理解が深まっている。 ・授業公開や進学希望者への課外等を実施したが、成果がもう少しである。 ・キャリアアドバイザーと連携して3年次生の進路・就職ガイダンス、自己申告書等の作成指導を実施。1・2年次生全員とも個別面接・アルバイトの相談等を実施し、進路意識が少しずつ高まった。	B	・担任以外の先生も積極的に個別面談し、生徒理解をさらに深める。 ・特別支援の必要な生徒を継続指導する。 ・授業公開・授業研究への参加者を増やし、授業改善に生かす。 ・課外の工夫や個別添削等を行う。 ・キャリアアドバイザーとの連携をさらに密にし、就職先開拓や面接指導等を行う。

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。